



一般国道23号 中勢道路

埋蔵文化財発掘調査概報22

(平成21年度調査)

2010.8

三重県埋蔵文化財センター



相川西方遺跡（第2次）全景（上空北から）



相川西方遺跡（第2次）SK28出土籠製品

例 言

- 1 本書は、三重県が国土交通省中部地方整備局から委託を受けた一般国道23号中勢道路建設予定地にかかる平成21年度の埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の負担による。
- 3 調査の体制は下記のとおりである。
 - ・調査主体 三重県教育委員会
 - ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査研究Ⅱ課

課 長	田村陽一		
主 査	齋部英幸	松葉和也	
主 事	浅尾 太	西口剛司	
技 師	水橋公恵	野島美沙子	
室内整理員	黒川敬子	太田浩子	森川相代
	北岡佳代子	山口香代	平井治代

 - ・土工作業受託機関 株式会社中浦土木（相川西方遺跡第2次調査）
朝日商会株式会社（丸地遺跡第1次調査・城ノ越遺跡第1次調査）
株式会社アート（本宮遺跡第1次調査）
- 4 調査に際しては、山田昌久氏（首都大学東京）に専門的なご指導とご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。
- 5 本書作成にかかる整理及び報告文執筆は、主として各遺跡の現場担当による。
- 6 本書で用いた座標は、世界測地系による国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は座標北を示す。
- 7 本書では、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』22版（日本色研事業株式会社 1999年）を使用した。
- 8 本書に用いた遺構表示略記号は、以下の通りである。
S K：土坑

本文目次

I 前言	（西口剛司）	1
II 相川西方遺跡（第2次）	（浅尾 太・野島美沙子）	7
III 丸地遺跡（第1次）	（西口剛司）	15
IV 城ノ越遺跡（第1次）	（西口剛司）	16
V 本宮遺跡（第1次）	（西口剛司）	17

挿図目次

第1図	中勢バイパス（12工区付近）遺跡位置図	2
第2図	中勢バイパス路線内遺跡位置図	3
第3図	相川西方遺跡調査区位置図	7
第4図	相川西方遺跡第2次調査遺構平面図	9
第5図	相川西方遺跡出土遺物実測図1	12
第6図	相川西方遺跡出土遺物実測図2	13
第7図	丸地遺跡調査区位置図	15
第8図	城ノ越遺跡調査区位置図	16
第9図	本宮遺跡調査区位置図	17

挿表目次

第1表	平成21年度中勢バイパス発掘調査遺跡一覧	2
第2表	中勢バイパス発掘調査成果一覧	4～6

I 前 言

1 中勢バイパスと埋蔵文化財保護

中勢バイパスは、三重県中勢地域の道路網を充実させるとともに、交通緩和とバイパス周辺の適切な土地利用を図り、地域の経済発展に寄与するために、一般国道23号のバイパスとして計画された鈴鹿市北玉垣町から松阪市小津町までの延長33.8kmの道路である。当事業地内における埋蔵文化財の保護取扱いについての協議は昭和58年から行われているが、その詳細については各概報に記載されているので参照されたい。

2 平成21年度の現地調査

平成21年度の埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約は、国土交通省中部地方整備局長と三重県知事との間で4月1日に締結した。契約期間は平成21年4月1日～平成22年3月31日である。

本年度の調査工程や具体的方法については、4月8日に国土交通省三重河川国道事務所と三重県埋蔵文化財センターで協議を行った。その後、同様の協議を8月、9月、10月にも行い、発掘調査業務の円滑な推進を図った。また、次年度の調査にむけて、用地取得状況や調査計画についての協議を12月、3月に行った。

現地調査としては、5～12月に相川西方遺跡の第2次調査、5～8月に本宮遺跡、9～11月に丸地遺跡・城ノ越遺跡の第1次調査を行った。

相川西方遺跡は、調査対象範囲のうち、昨年度の第1次調査の結果をもとに、調査の条件が整った3,472㎡を、第2次調査の対象範囲とした。

丸地遺跡は、調査対象範囲7,100㎡、調査面積は560㎡である。調査区からは、少量の土師器片、山茶碗片などが出土した。

城ノ越遺跡は、丸地遺跡の南、相川の対岸に位置し、調査対象範囲3,070㎡、調査面積は240㎡である。

本宮遺跡は、調査対象範囲8,700㎡、調査面積は1,200㎡である。

3 平成21年度の整理作業と報告書作成

過年度に現地調査を実施した池新田遺跡、木造赤坂遺跡、井ノ上遺跡、筋違遺跡、相川西方遺跡の遺物実測・写真撮影、木製品・金属製品の保存処理、調査現場の図面・写真整理など、報告書作成に向けての資料整理を鋭意行った。

また、『舞出北遺跡発掘調査報告2』を作成、刊行した。

4 公開普及

発掘調査に伴う公開普及活動としては、相川西方遺跡において、津市教育委員会との協働による地元小学生の現地学習、現地説明会、また刊行物として、発掘調査概報、調査ニュースを発行した。

相川西方遺跡の現地説明会は、平成21年11月14日に実施した。前日までの雨の影響で調査区の大部分が水没し、地面も泥濘状態ではあったが、56人の参加者があり、現場事務所内でパワーポイントを使った遺構の説明、出土遺物の展示紹介、また希望者には、調査区の見学・説明を行った。

7月には、昨年度第1次調査を行った相川西方遺跡、稲降遺跡の調査結果の特集と中勢バイパス関係の発掘調査のあゆみを記載した『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報21』を発行した。

11月には、相川西方遺跡（第2次）の調査成果を特集した『中勢道路調査ニュース』No52を発行した。

また、平成22年2月には、相川西方遺跡、丸地遺跡、城ノ越遺跡、本宮遺跡の調査結果をまとめた『中勢道路調査ニュース』No53を発行した。



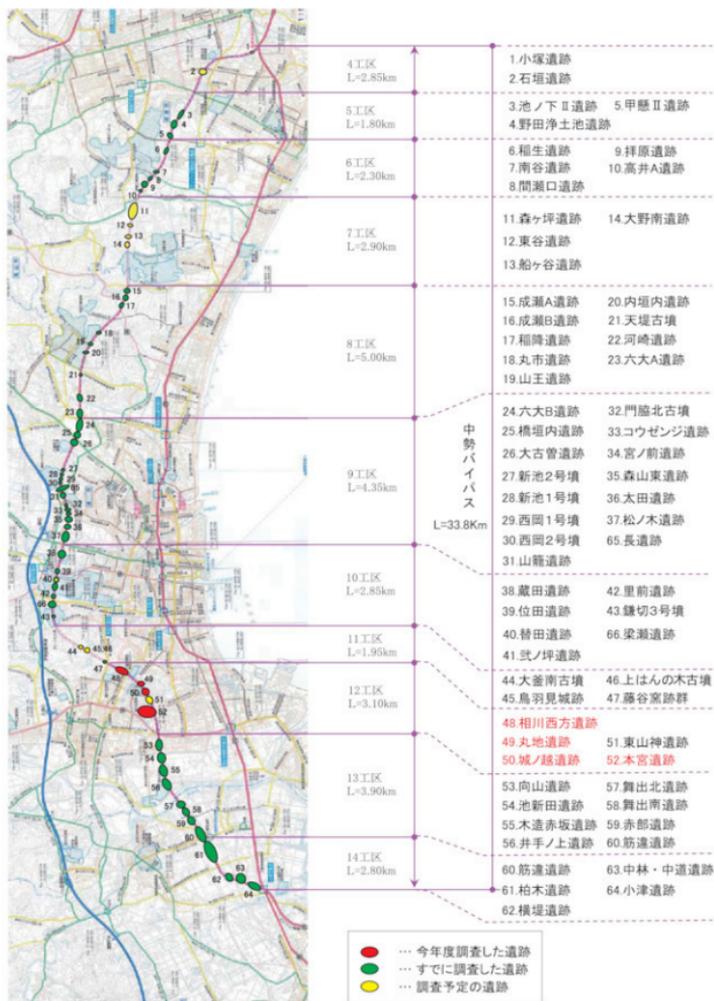
写真1 現地説明会の様子

	工区	番号	遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	担当者
第2次調査	12	48	相川西方遺跡	津市久居相川町	3,472㎡	平成21年5月11日 ～平成21年12月21日	浅尾 太 野島美沙子
第1次調査		49	丸地遺跡	津市垂水	560㎡	平成21年9月29日 ～平成21年11月17日	水橋公恵 西口剛司
		50	城ノ越遺跡	津市久居小野辺町	240㎡	平成21年9月29日 ～平成21年11月17日	水橋公恵 西口剛司
		52	本宮遺跡	津市久居野村町	1,200㎡	平成21年5月1日 ～平成21年8月21日	水橋公恵 西口剛司
合 計					5,472㎡		

第1表 平成21年度中勢バイパス発掘調査遺跡一覧



第1図 中勢バイパス（12工区付近）遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院1：25,000『津西部』『津東部』）



第2図 中勢バイパス路線内遺跡位置図

品名	品名	所在地	積込前数量 (個)	SAS	坪元	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22
24	1人用座席	津島大工座席	28,235	442	436	17,525	3,220	3,250	1,250	420																
25	組内用座席	津島大工座席	12,000	176	176		1,625	25	40																	
26	6人用座席	津島一舟目	12,125	662	352	300	5,100	240	7,032																	
27	座席分譲	津島一舟目	—	189	0	0	0	0	0	0	398															
28	座席分譲	津島舟目	—	0	20	0	0	0	0	0	0															
29	舟目舟席	津島舟目	2,000	2,000	2,000	0	20	0	2,000																	
30	舟目舟席	津島舟目	—	30	0	0	30	0	0																	
31	舟目座席	津島舟目	1,100	205	205	1,100	1,100	1,100	1,100																	
32	舟目座席	津島舟目	1,100	0	0	1,100	0	0	0																	
33	1人用座席	津島舟目	—	144	60	0	0	0	0																	
34	1人用座席	津島舟目	2,000	144	144	0	0	0	0	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
35	舟目座席	津島舟目	3,230	240	240	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
36	舟目座席	津島舟目	3,320	609	609	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
37	舟目座席	津島舟目	2,800	144	144	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
38	舟目座席	津島舟目	3,700	2,800	2,800	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計			77,720	2,915	2,240	0	300	100	60	0	0	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
39	舟目座席	津島舟目	12,800	1,356	608	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
40	舟目座席	津島舟目	1,100	414	414	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
41	舟目座席	津島舟目	5,900	422	174	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
42	舟目座席	津島舟目	5,700	5,700	300	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
43	舟目座席	津島舟目	3,000	256	160	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
44	舟目座席	津島舟目	—	1,152	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
45	舟目座席	津島舟目	—	3,620	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計			36,500	43,962	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
昭和船外津島船隻株式会社役員会																										
小計			36,500	43,962	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
昭和船外津島船隻株式会社役員会																										

Ⅱ 相川西方遺跡（第2次）

1 はじめに

相川西方遺跡は、津市久居相川町に所在し、二級河川相川の北側に位置する。遺跡の立地する地域は浅い谷状の部分に位置する（第3図）。これまで弥生時代から古墳時代を中心とした遺跡として知られてきた。西側の丘陵上に久居古窯址群、北西側の丘陵に藤谷窯跡群があり、県内でも有数の須恵器・埴輪生産地である。

平成20年度の第1次調査で、弥生時代末から古墳時代を中心とした遺構・遺物の広がり確認された。これをうけ、平成21年度、調査対象面積のうち3,472㎡について第2次調査を行った。

2 調査の概要

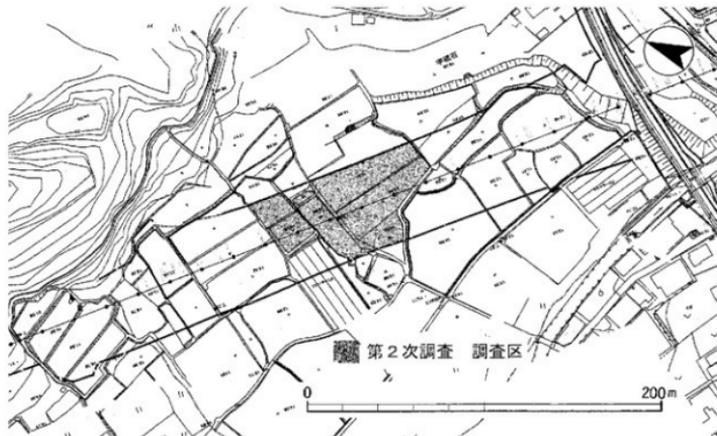
【基本層序】

層序は、調査区の東西及び南北で違いがみられるが概略は以下のようである。

第Ⅰ層：暗褐色土（表土）、第Ⅱ層：黒褐色土（東端から南側は、黄灰色～暗黄灰色粘質土）、第Ⅲ層：黒褐色～褐灰色粘質土（中央から東は、にぶい黄褐色土）、第Ⅳ層：黄灰色粘土（中央から東にのみ見ら

れる）、第Ⅴ層：黒色～褐灰色粘土、第Ⅵ層：黒褐色粘土、第Ⅶ層：褐灰色粘土、第Ⅷ層：明オリーブ灰色土～緑灰色シルト（東側にはない）、第Ⅸ層：黒色粘土である。

遺構は、第Ⅵ層から掘削されているが、第Ⅵ層と遺構埋土が類似しており不明瞭であるため、検出は第Ⅷ層上面で行った。この面での調査終了後、一部にトレンチを設定し下層を調査した。その結果、調査区中央部では、第Ⅸ層以下上層から順に有機質を含む灰黄褐色粘土層、有機物を多く含む黒色土層、黒褐色土と灰オリーブ色粘土の混合層、灰色粘土～灰オリーブ色シルト層、明オリーブ灰色土層、オリーブ灰色の岩盤層が形成されている。灰オリーブ色シルト層以下の層は、南側で上昇する。このため、調査区南側では、Ⅱ層下にこれらの層、もしくは、これらの層が変性したと考えられる層が見られる。東部では、Ⅸ層以下、緑灰色粘質シルト層、緑灰色砂質シルト層、緑灰色砂層（礫多く含む）となっている。



第3図 相川西方遺跡調査区位置図（1：2,500）

【遺構】

調査区南部の高い部分を除き、多数の土坑を確認した。確認された土坑は約250基にのぼる（第4図）。遺構出土の遺物から判断すると、弥生時代末期～古墳時代初期の遺構とみられる。

形は楕円形や不整形であり、規模は長径1～4m、深さは約20～50cmのものが多い。また、オーバーハングしているものが多い。以下、個々の土坑について概略を記す。

SK3 長径1.6m、短径1.3m、深さ約30cmの楕円形土坑である。土坑底より正位で甕（6）が出土した。

SK20 長径2.3m、短径1.7m、深さ約20cmの方形に近い土坑である。埋土は、黒色粘土に黒色粘土ブロックと褐灰色粘土ブロックが混じる。土坑の検出面より少し掘り下げたところで壺体部（5）が出土した（写真2）。

SK28 長径1.4m、短径1.1mの楕円形土坑である。深さは約70～85cmあり、底面には段がある。埋土は黒色粘土である。壁面は一部オーバーハングしている。土坑の検出面から深さ約50cmの南壁際から籠製品（22）と手焙形土器（10）が出土した。籠製品の方が土器よりもやや高い位置にあった（写真3）。なお、手焙形土器には埋土の粘土が入っていたが、洗浄選別した結果、特に混入物は見られなかった。

SK47 長径1.0m、短径0.9m、深さ約70cmの楕円形土坑である。埋土は上層が黒色粘土、下層は褐灰色粘土に黒色粘土ブロックと土坑底面地山粘土ブロックを含む。これらの層の間には、一部黒色粘土に褐灰色粘土ブロックを含む層がみられる。壁面は、オーバーハングしている。底面から10cm程の高さのところから籠製品及び不明木製品（20）が出土した（写真4）。

SK54 褐灰色粘土層の南端に位置する長径約2.5mの不整形土坑である。深さは、約40～50cmで底面には段がある。壁面はややオーバーハングしている。埋土は、上層が黒褐色粘土、下層が黒褐色粘土に褐灰色粘土ブロックを多く含む。遺物は出土していない。

SK71 長径4.1m、深さ約30～40cmの不整形土坑である。壁面はややオーバーハングしている。



写真2 SK20遺物出土土状況（東から）



写真3 SK28（北から）



写真4 SK47遺物出土状況（南から）



写真5 SK47出土籠製品



第4図 相川西方遺跡第2次調査遺構平面図（1：800）



写真6 調査区全景（西から）



写真8 調査区西部の遺構の様子（北から）



写真7 調査区東部の遺構の様子（南西から）



写真9 SK83遺物出土状況（南から）

埋土は、黒色粘土に黒褐色粘土ブロック、褐灰色粘土ブロックを含む。遺物は出土していない。

SK74 長径1.7m、短径1.2m、深さ約30cmの楕円形土坑である。埋土は、黒色粘土に褐灰色粘土ブロックを含む。甕(13)が出土している。

SK83 長径1.2m、短径1.1m、深さ30cmの楕円形土坑である。壁面は一部オーバーハングしている。埋土は、大きく3層に分かれ、上層が黒色粘土、下層は黒褐色粘土に褐灰色粘土ブロック、黒色粘土ブロックを含む。これらの層の間にラミナが見られる層がある。検出面から少し掘り下げたところで半載された台付甕(15)が出土している(写真9)。

SK89 長径1.2m、深さ約20cmの不整形土坑である。埋土は黒色粘土に褐灰色粘土ブロックと黒色粘土ブロックを含む。遺物は出土していない(写真10)。

SK94 長径1.4m、深さ約10cmの不整形土坑である。埋土は黒色粘土に黒褐色～褐灰色粘土ブロックを少量含む。甕(17)が出土している(写真11)。

SK104 長径1.6m、短径1.1m、深さ20～30cm程の楕円形土坑である。埋土は黒色粘土に褐灰色粘土ブロックを少量含む。広口壺(14)が出土している(写真12)。

SK109 長径2.1mの不整形土坑である。深さ約25～40cmで底面に段がある。埋土は、上層が黒色粘土、下層はこれに一部褐灰色粘土ブロックが混じる。遺物は出土していない。

SK117 長径2.2m、深さ約20cmの不整形土坑である。底部は10cm程部分的に深くなっている。埋土は、黒色粘土に褐灰色粘土ブロックを少量含む。土師器小片が出土している(写真13)。

SK127 長径2.2m、短径1.9m、深さ約30cmの楕円形土坑である。埋土は、上層は黒色粘土に褐灰色粘土が混じり、下層はこれに更に土坑地面地山のブロックが混じる。遺物は出土していない。

【出土遺物】

今回の調査で出土した遺物は、コンテナバット9箱と調査面積に比して少ない。また、完形の土器はなく、甕や壺が大半を占める。

1～5は体部片であるが、おそらく壺である。いずれも風化が著しく、特に外面は調整が不明瞭であ



写真10 SK89土層(東から)



写真11 SK94遺物出土状況(北から)



写真12 SK104(西から)



写真13 SK117(東から)

る。1・4は外面にハケ後ヘラミガキが施されており、内面はハケ調整である。2・3は内外面ともにハケ調整が確認できる。5は風化が著しく、底部にユビオサエが確認できるのみである。いずれも上村編年（注1）第V様式後半～第VI様式に比定される。

6は台部が欠損しているが、台付甕と思われる。体部中央よりやや下部に2条の貼付突帯がめぐる。体部中央は斜め方向のハケ調整、下部は縦方向のハケ調整である。内面には工具痕が確認できる。貼付突帯のある台付甕は珍しく、近江の影響を受けている可能性がある。第V-5様式～第VI様式に相当するであろうか。

7は広口壺である。頸部・体部界に突帯を貼付け、その上にキザミを施す。外面は風化が著しく、ハケ調整がわずかに確認できるのみである。

8・9は内彎高杯である。8は粗雑な作りであり、縁が不明瞭である。3方透孔とされる。9は縁以上のみの残存であるが、内外面ともにヘラミガキが丁寧に施されている。

10は手焙形土器である。覆部が欠損しているため、接合方法は不明である。鉢最大径よりやや下に突帯がめぐり、その後ハケ調整される。一部ハケ調整後ヘラミガキが認められる。底部内面に有機質が丸まって付着していたが、同定の結果、組織が潰れており、植物遺体であることしかわからなかった。第VI-2様式～VI-3様式に相当する。高橋編年（注2）では3a期に相当する。

11は壺の体部片である。ナデ調整の後、櫛描直線文と波状文が交互に施されている。

12は口縁部がくの字状に外反する甕である。外面にはタタキ技法を用いている。

13は受口状口縁甕である。外面はハケ調整後波状文が施され、貼付突帯がめぐる。貼付突帯は1条の平たい突帯の中央に凹線を加えることにより、2条の突帯を作り出し、さらにキザミを施している。貼付突帯のめぐる受口状口縁甕の出土は東海地方でも珍しく、近江の湖南から湖東地域からの搬入品である可能性があり（注3）、もしくは同地域からの強い影響を受けていると思われる。兼康編年（注4）第V様式後半に併行するだろうか。

14は広口壺である。今回の調査で出土した壺の口

縁部はこの14のみである。口縁部は直線的に開く。第V様式後半～第VI様式に相当する。

15はS字状口縁台付甕である。口縁部と肩部に刺突が施されていることから赤塚分類（注5）のO類に相当する。

16は有稜高杯である。口縁部はやや内彎傾向をもつが、杯部は比較的浅い。

17は甕である。口縁部は、くの字状に外反し、口縁端部はやや内彎する。外面にはタタキ技法を用いている。

18は台付甕である。台部の端部折り返しはなく、第V-5様式～第VI-1様式に相当する。

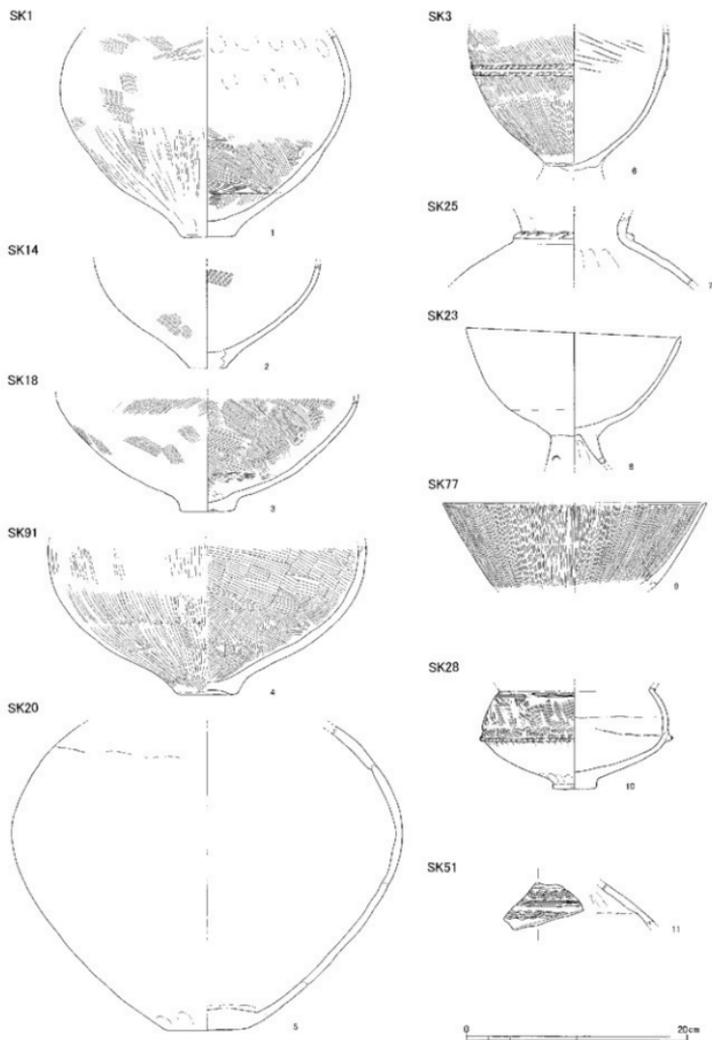
19は家形埴輪片である。突帯の直下に透孔が認められることから、この透孔が家形埴輪裾部のくりこみ、もしくは高床式建物の窓である可能性が考えられる。

20は不明木製品である。片面に工具痕が認められ、同じ遺構から籠製品が出土したことから、籠製品の材料となるヘギ材の可能性が指摘された。しかし樹種同定の結果、ウツギ属と同定され、一方籠製品はタケと同定されたため、籠製品とは関係がないことがわかった。

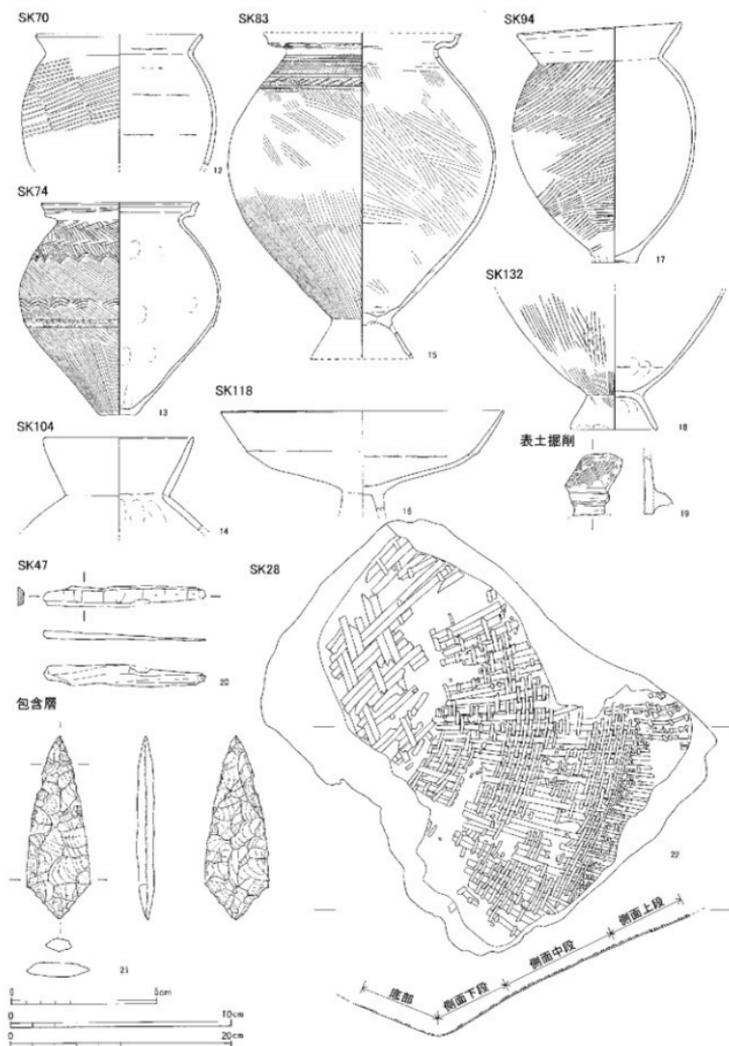
21は有茎尖頭器である。茎部は未発達で、返しが不明瞭である。石材はチャートである。

22は籠製品である。樹種同定の結果、榎材・横材ともタケであることがわかった。編み方は底部・側面で4通り確認され、口縁部は残存していない。底部は網代編みで、2本を1単位として2本超2本潜1本送である（注6）。側面中段はござ目編みで、2本超2本潜1本送である。側面中段はござ目編みで、1本超1本潜1本送である。側面上段は榎材を半分に裂いた上で、もじり編みをしている。籠製品の観察からは、もじっている横材が1本なのか複数であるのかはわからない。また、もじりやすいようにココ添えしている可能性もある（注7）。今回の調査ではもう1点の籠製品がSK47から出土しているが、22とはほぼ同様の編み方がなされていると考えられ、材質もタケであることがわかっている。

今回の調査で出土した土器のうち、1～6・18は体部以下の残存である。13・15・17はおよそ縦半分が残存である。また、10は覆部が欠損しており、高



第5図 相川西方遺跡出土遺物実測図1 (1:4)



第6図 相川西方遺跡出土遺物実測図2 (12~20は1:4、21は2:3、22は1:2)

杯は全て杯部しか残存していない。これらのことから、全てが偶然このような残り方をしたとは考えにくく、意図的に割られている可能性がある。祭祀的な意味もあるかもしれないが、採掘した粘土を入れるためのバケツ代わりにしていた可能性もあるだろう(註8)。

3 まとめ

今回の調査では上述のように多くの土坑が確認された。これら多数の土坑が確認された部分には褐灰色粘土層(第Ⅶ層)があり、土坑がほとんどみられない南部ではこの層はみられず砂質土となる。

また、土坑底面土の特徴については、概ね東部、中央部、西部で分けることができる。東部では褐灰色粘土層(第Ⅶ層)、黒色粘土層(第Ⅸ層)及びこの下の緑灰色粘質シルト層まで掘られている。大部分の土坑は、緑灰色粘質シルト層まで掘られているが、この層を深く掘り込んでいない。中央部は、褐灰色粘土層(第Ⅶ層)、黒色粘土層(第Ⅸ層)上面まで掘られている土坑が多い。西部では、明オリーブ灰色土～緑灰色シルト(Ⅷ層)、黒色粘土層(第Ⅸ層)上面まで掘られている土坑がみられるが、明オリーブ灰色～緑灰色シルト層(Ⅷ層)まで掘られている土坑が多い。これらの特徴は、先に記した調査区の東西の層序の違いにもよるが、調査区全体として概ね褐灰色粘土層(第Ⅶ層)は掘り抜いているがその下の層までは深く掘り込んでいないといえる。

さらに、埋土の状況は、概ね以下の3つの状態に分けることができる。

- 1 黒色～黒褐色粘土層の単一層からなる場合。(一部ラミナがみられることがある。)
 - 2 黒色、黒褐色または褐灰色粘土に黒色～黒褐色粘土ブロック、褐灰色粘土ブロック等が混じる単一層からなる場合。
 - 3 上記の2層が層を成している場合。
- 上記、1については、ラミナが形成されるものがあり、土坑掘削後放棄され自然堆積をしたことが考えられる。また、2、3については、粘土ブロックが土坑の途中または全てに含まれていることから、土坑掘削後すぐに、土坑の途中まで埋め戻し放棄したかあるいは全て埋め戻したと考えられる。

以上のことを踏まえ、今回確認された土坑につい

てまとめると以下の点が特徴として挙げられる。

- ・褐灰色粘土層(第Ⅶ層)が見られる部分に土坑が集中している。
 - ・形状が不整形のものが多く規模も様々である。
 - ・深さは、褐灰色粘土層を掘り抜き、その下層に及んでいるものもあるが、下層を深く掘り込む土坑は少ない。また、東部に比べ西部の方が浅い遺構が多い。
 - ・埋土には褐灰色粘土が含まれる土坑もあるが、埋め戻しには、ほとんど使われていない。
- 以上のことから、今回確認された土坑の多くは、褐灰色粘土の採取を目的として掘られたことが窺え、粘土採掘場の可能性が高いと考えられる。

これまで県内の調査では、粘土を採掘した土坑が集中して見つかった例はなく、今回の調査結果は当時の土器生産を考える上で重要な成果といえる。しかし、他の性格の土坑の可能性も考えられることから、今後さらに詳細な分析を行い、土坑の性格について検討していくことが必要である。

〔註〕

- 1 以下、弥生土器・土師器については、特に断らない限り下記文献に拠った。
上村安生「1」伊勢・伊賀地域;『弥生土器の様式と編年 東海編』加納俊介・石黒立人編 木耳社 2002年
- 2 高橋一夫「手焙形土器の研究」六一書房 1998年
- 3 石井智大氏のご教示による。
- 4 兼康保明「9 近江地域;『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』寺沢薫・森岡秀人編 木耳社 1990年
- 5 赤塚次郎「V 考察;『廻問遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1990年
- 6 編み方の呼び方はさまざまあるが、ここでは以下の文献を参考とした。
野田真弓「第3章 青谷上寺地遺跡出土のかご」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1 木製容器・かご』鳥取県埋蔵文化財センター 2005年
佐々木由香「割製木部材・藁・草の編み組み加工容器」『考古学ジャーナル』№542 ニューサイエンス社 2006年
- 7 首都大学東京山田昌久教授のご教示による。
- 8 註7に同じ。

III 丸地遺跡（第1次）

1 はじめに

当遺跡は津市垂水に所在し、相川西方遺跡から南東へ500m離れた相川北岸に位置する。弥生時代から鎌倉時代の遺跡と考えられている。

周辺の主な遺跡としては、北西側に相川西方遺跡、南側に城ノ越遺跡、東山神遺跡、本宮遺跡などがある。

2 調査の概要・結果

今回は条件の整った範囲を対象に、幅2mのトレンチ状の調査区を11ヶ所（A～K区）設定し、第1次調査を行った（第7図）。

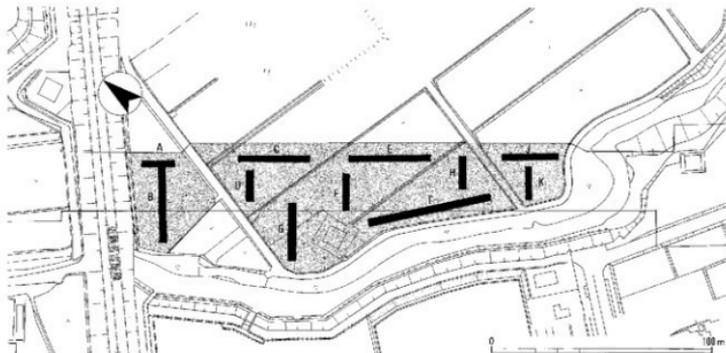
調査の結果、北西側の近鉄線路沿いは、現代の攪乱土である表土が厚く堆積しており、それも含めると地山まで2m以上の深さに達した。それより北東側は、前年まで水田として使用されており、調査範囲中央付近で約1～1.6m、南東側で約0.3～0.6mの深さで、粘土層及び砂礫層の地山が確認された。調査範囲が南東側へ向かうほど土の堆積が浅くなっていく傾向があった。またA・B・F～I区からは、土器器残片、高杯の杯部、山茶碗片などが出土したが（写真14）、田河道による流れ込みと考えられる。いずれの調査区においても、遺構は確認できなかった。



写真14 出土遺物



写真15 A区（南東から）



第7図 丸地遺跡調査区位置図（1：2,000）

IV 城ノ越遺跡 (第1次)

1 はじめに

当遺跡は津市久居小野辺町地内、相川の南側丘陵上に位置する。昭和58年度に行われた旧久居市の分布調査では、室町時代以降の土師器鍋等の遺物の散布が確認されており、その頃の遺跡と考えられている。現在は、畑地、果樹園、荒地などになっている。

周辺の遺跡としては、東山神遺跡、北小幡田遺跡などが、同時代頃の遺跡として考えられている。

2 調査の概要・結果

今回は条件の整った範囲を対象に、幅2mのトレンチ状の調査区を4ヶ所(A～D区)設定し、第1次調査を行った(第8図)。なお、対象地は遺跡範囲の最北端に位置する。

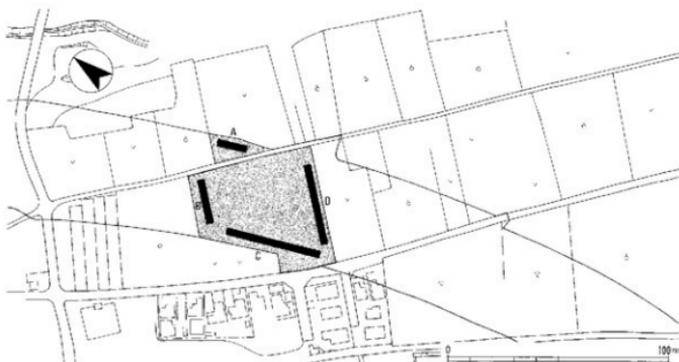
調査の結果、いずれの調査区でも、表土直下約20cmで地山が確認された。全ての調査区において、遺構・遺物は確認されなかった。



写真16 A区(西から)



写真17 D区(南から)



第8図 城ノ越遺跡調査区位置図(1:2,000)

V 本宮遺跡 (第1次)

1 はじめに

当遺跡は津市久居野村町地内、相川の南側丘陵の縁辺部に位置し、最近まで畑地及び果樹園として利用されていた。遺跡の時期としては、縄文時代から弥生時代頃と考えられている。なお、かつて当該地の西方で試掘調査が行われた(註1)。

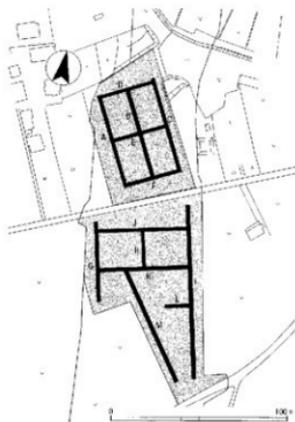
2 調査の概要・結果

今回は条件の整った範囲を対象に、幅2mのトレンチ状の調査区を13ヶ所(A～M区)設定し、第1次調査を行った(第9図)。

当遺跡範囲は、中央付近から南に向かって傾斜がきつくなっている。調査の結果、表土直下約20～50cmで地山に達したが、いずれの調査区からも遺構・遺物は確認されなかった。

(註)

1 『本宮遺跡試掘調査報告』本宮遺跡調査会 1973年



第9図 本宮遺跡調査区位置図(1:2,500)



写真18 北側A・D区(西から)



写真20 中央付近M区(北から)



写真19 北側D区(西から)



写真21 南側I・M区(南から)

報告書抄録

ふりがな	いっばんこうどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろまいぶらんふんざいはくつちょうきがいほうにじゅうに							
書名	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報22							
副書名								
巻次								
シリーズ名	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	22							
編著者名	浅尾 太 野島美沙子 西口剛司							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	2010(平成22)年 8月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "		m ²	
あいちのちのち(はく)いせき 相川西方遺跡	みえけんつひのひさいかいかわちょう 三重県津市久居相川町	201	b 180	34° 41' 21"	136° 29' 14"	2009.5.11～ 2009.12.21	第2次調査 3,472	一般国道23号 中勢道路建設
まるちいせき 丸地遺跡	みえけんつひのちらみ 三重県津市垂水	201	a 834	34° 41' 07"	136° 29' 33"	2009.9.29～ 2009.11.17	第1次調査 560	一般国道23号 中勢道路建設
しらのこしいせき 城ノ越遺跡	みえけんつひのひさいかいのんべちょう 三重県津市久居小野辺町	201	b 191	34° 40' 58"	136° 29' 39"	2009.9.29～ 2009.11.17	第1次調査 240	一般国道23号 中勢道路建設
ほんごういせき 本宮遺跡	みえけんつひのちらみのらちょう 三重県津市久居野村町	201	b 202	34° 40' 27"	136° 29' 38"	2009.5.1～ 2009.8.21	第1次調査 1,200	一般国道23号 中勢道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
相川西方遺跡	遺物散布地	弥生時代 古墳時代	土坑、溝		弥生土器・土師器・手焙形土器 甕製品・尖頭器・埴輪片		粘土探掘坑	
丸地遺跡	遺物散布地		なし		土師器残片・高杯片 須恵器片・山茶碗片			
城ノ越遺跡	遺物散布地		なし		なし			
本宮遺跡	遺物散布地		なし		なし			
要 約	相川西方遺跡	相川の北側、浅い谷の部分に位置する。西側の丘陵上に久居古土器群があり、北側の丘陵には藤谷高跡群がある。弥生時代終末～古墳時代初頭頃の土坑が約240基確認された。土坑は不整形のものが多く、粘土がとれるところに集中することなどから粘土探掘坑と考えられる。また、保存状態がよく、精巧に作られた甕製品2点の他、手焙形土器や壺、甕などの遺物も出土した。						
	丸地遺跡	相川の北側に位置する。第1次調査を行った結果、表土下は旧河川の影響が濃く、いずれの調査区からも遺物包含層、遺構は確認されなかった。遺物は、土師器残片、高杯片、山茶碗片などが少量出土したが、旧河川の影響による流れ込みと考えられる。						
	城ノ越遺跡	相川の南側の丘陵上に位置する。第1次調査を行った結果、表土直下は地山になっており、いずれの調査区からも、遺物包含層、遺構、遺物は確認されなかった。						
	本宮遺跡	相川の南側の丘陵縁辺部に位置する。第1次調査を行った結果、表土直下は地山になっており、いずれの調査区からも、遺物包含層、遺構、遺物は確認されなかった。						

一般国道23号 中勢道路
埋蔵文化財発掘調査概報22

2010 (平成22) 年 8 月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 光出版印刷株式会社



(表紙写真：相川町(左道線))